

佐伯 理一郎

—同志社医学の支柱
「熊本バンド」の後裔—本井 康博
(大学神学部教授)

●医学部の夢破れて

2008年4月、同志社大学に生命医科学部が誕生した。同志社系看護学校(京都看護婦学校)と同志社病院が廃止されて、102年を経つ。この歴史的な節目に想起したいのは、佐伯理一郎である。

日本における産婦人科の先駆者であると同時に、クリスチャン医師・教育者としても高名である。同志社出身者ではないが、新島襄やベリー(J. C. Berry)、リ

チャーズ(L. Richards)らが1887年に創設した、同志社の看護学校や病院に関与しただけでなく、学園がそれらを手放した時、買収して事業を継承したのは、佐伯である。仮にそれらが医学部に発展しておれば、間違いなくその支柱となっていたであろう。

●同志社のサポーター

佐伯の貢献は医学教育に止まらない。同志社理事(1918年〜1919年)を務めたほかに、女性宣教師のデントン



新婚当時の佐伯夫妻 1893年11月23日、夫人の出身地、奈良県川上村大滝で挙式

(M. F. Denton) を助けて、同志社女学校(現同志社女子中高・大学)や出町幼稚園(現同志社幼稚園)をも後援した。

また新島が将来の大学用地として買収、確保しておいた旧彦根藩屋敷跡(寺町鞍馬口の7431坪)を1910年に財政難から同志社が売却したとき、それを5万2千円で購入したのも佐伯であった(拙稿「佐伯理一郎」110〜111頁、『同志社山脈』晃洋書房、2002年)。

町医者にしては、異例の資金力である。資金の出所は、判然としない。あるいは、後述する夫人の実家が陰のスポンサーであったのか。

●熊本から東京へ

佐伯は熊本県阿蘇郡一ノ宮宮地(現阿蘇町)に生まれた。生家跡には「生まれいでし処とききはなつかしき 己がたちちねに逢ふ心地して」と刻む歌碑が立つ。父は阿蘇神社付の宮侍であった。生家は「熊本バンド」の宮川経輝、市原盛宏の家と三軒並びであった。宮川たちは、熊本洋学校から帰省すると佐伯にキリスト

教情報を流すことがあった(佐伯義一「佐伯理一郎と横須賀」、未刊)。

その結果であろう、「私は明治7年「1874年」、年甫めて13歳の時から神を信じました」と、自身、証言する(佐伯理一郎「幕末及明治に於けるアメリカ医師の活動に就いて」69頁、『基督教研究』24の1、1950年1月)。

1878年9月、阿蘇山麓から県立熊本医学校に進み、浜田玄達(日本産婆学の開拓者)らに学んだ。1892年7月1日、卒業と同時に「内務省免状」(医師免許)を授与された。11月、「東京遊学」に旅立ち、有斐学舎(熊本県人寄宿舎)に入った。ドイツ語学習に取り組み傍ら、熊本医学校の先輩、北里柴三郎から「アナトニー」を習ったが、「僅一日



生家跡地の歌碑 阿蘇神社近くの熊本県阿蘇町宮地に立つ(熊本県文化企画課提供)

にて中止」と日記に記す。

そのほか、水川町の赤坂病院医師、ホイットニー(W. N. Whitney)の知遇も得た。彼はフィラデルフィアのペンシルバニア医科大学を1880年に優等で卒業したクエイカー(フレンド派)の宣教師であった(同前、75頁)。ホイットニーは聖書友会の主軸で、佐伯は日記に、同会に1883年12月に入る、と記す。

キリスト教求道で言えば、旧知の宮川から、同じ「熊本バンド」の小崎弘道の紹介を受け、指導を受けた。1884年3月2日、小崎の第一基督教会(麻布仲町の粟津高明宅が仮会堂)で小崎から洗礼を受けた。その半月前の日記には朱点を振って「新島襄氏ノ熱心ナル説教ニ感ズ」と記す。新島の説教は人信への有力なアクセルになったであろう。

●フィラデルフィアへ

1884年10月、海軍軍医補(海軍少尉)に任じられ、横須賀の海軍病院に赴任。海軍機関学校で英語を教えていた歯科医のギュリック(T. C. Gulick)や、

横浜の宣教師、ピアソン (J. H. Pearson)、小崎らの協力を得て地域伝道に励み、ついに伊藤藤吉を牧師に横須賀教会を立ち上げた (同前、75頁)。

その後、共立東京病院勤務を経て、研修のために欧米に派遣された。横浜のヘボン (J. C. Hepburn) の紹介で彼の母校、ペンシルバニア医科大学に入学した (同前、70頁)。看板教授のオスラー (W. Osler) から指導を受けた唯一人の日本人、として日本オスラー協会 (日野原重明会長) では、注目されている。が、当時の佐伯の手紙には、世話になった5人の教授の中にオスラーの名はない。

● 内村鑑三、新渡戸稲造との交流

さて、留学生生活で目立つのは、内村鑑三や新渡戸稲造との交流である。実は、内村とは、東京で開かれたキリスト教徒親睦会 (1884年1月) ですでに邂逅していた。当時、内村は小崎弘道や長田時行が杉田玄端の出張所 (尊生舎) で開いていたキリスト教集会 (東京第一基督

教会講義所) を助けていたので、佐伯もそれに加わった。佐伯日記には、集会では「内村氏最毛勉ム」とある (鈴木範久『内村鑑三日録』1、155頁、教文館、1998年)。

内村との交流はアメリカで再開される。1887年の夏にノースフィールドで開催されたムーディー (D. L. Moody) の夏期学校で旧交を温めた (同前、239頁)。ついで、新渡戸ともフィラデルフィアで知り合った。その後、ふたりは期せずして渡独する。新渡戸がクエイカー教徒のエルキンソン (M. Elkinton) と結婚するさい、周囲が反対するなかで佐伯はあえて賛意を示した。

佐伯は、ドイツ留学中の広井勇 (札幌農学校で新渡戸と同級。後に帝大教授) と共にただ二人、新渡戸から結婚の件を内密に相談された仲であった。新渡戸がアメリカに戻ってから挙げた結婚式に日本人として出席したのは、後に佐伯の義姉となる土倉政子 (同志社女学校卒。内田康哉外務大臣夫人) だけであったのも、奇しきことである。

ちなみに、佐伯は新渡戸の後を追って

ドイツに渡った。新渡戸はドイツ在留日本人の行状が芳しくないことを見聞して、「純潔を通して来たのは君と僕だけだ」と佐伯にしみじみと述懐したという (拙稿「新渡戸稲造と同志社」34〜35頁、『新渡戸稲造研究』13、2004年)。

● 同志社病院へ

帰国した佐伯は海軍軍医を退き、恩師の小崎 (同志社社長) の斡旋で同志社病院に赴任し、院長のペリーを助けた。以後、新渡戸や内村との交流も復活する。とくに彼らが京都に居住した時は、旧交を温める願ってもない好機会となった。

佐伯は内村には毎年のようにクリスマス・プレゼント (金銭) を贈り、不遇な内村を陰で支えた (拙稿「佐伯理一郎と内村鑑三」136頁、『同志社談義』19所収)。佐伯の回想によると、「鑑三君とは、私が麻布中町の教会を小崎弘道君等と創設した時分の同教会員であったが、米留学をも共にし、爾来15年間の親友で、常に彼の指導を受けて居るが、殊に妻の最大の愛読書は、彼の『聖書之研究』で、



京都看病婦学校のスタッフと学生 赤ん坊を抱いている左端の男性が、佐伯 (1897年6月29日撮影)



清和キリスト教会の現況 京都市上京区室町通下長者町上ル清和院町 (京都ガーデン・パレス西隣)

同志を手に入れると、幾度も幾度も繰返して耽読している」(佐伯理一郎「我家庭に於ける宗教教育」、『基督教世界』1912年7月11日)。内村への心酔は、ついには「内村公誕生にまで発展した。一方、新渡戸との交流であるが、彼の同志

社理事就任は、佐伯と同時であった。あるいは佐伯の推薦か。デントンを新渡戸に紹介したのも佐伯であろう。デントンのサイン帳には、新渡戸の立派なサインが残る。佐伯は京都YMCAの初代理事長を務めるなど、社会教育にも貢献したが、伝道にもすこぶる熱心であった。自邸内に独力で教会 (現キリスト伝道隊・清和キリスト教会) を立ち上げ、家族や教職員、学生の信仰育成にも心を砕いた。その際、

夫人の小糸の協力は不可欠で、佐伯家における宗教教育などは、「全然妻に一任している」と述懐する（同前）。

● 土倉小糸

妻の小糸は、土倉庄三郎の四女で、双生児の姉（大糸）と共に同志社女学校に学んだ。土倉は「吉野の山林王」と呼ばれた資産家で、自由民権運動のパトロンであると同時に、新島の大学設立運動にも共鳴し、真つ先に寄付（五千円）をした後援者である。自身、入信こそしなかったが、数人の子息は同志社英学校へ、数人の娘たちは梅花女学校、ついで同志社女学校へと送った。小糸は姉の富子、政子、大糸に続いて同志社女学校を卒業した。

理一郎と小糸との結婚式では、原田助の補助を受けて海老名弾正が司式を、そして媒酌人をデントンが務めた（司式者ふたりはともに、熊本

出身で後の同志社総長）。デントンと共に小糸は1924年には同志社理事に選出された。夫妻して理事となった例は珍しい。ちなみに大糸は、妹の小糸と結婚式が同日であったばかりか、夫が佐伯とほぼ同期にペンシルバニア医科大学を出た医師、川本恂蔵（同志社に学び、アメリカ留学後に同志社病院副院長、同志社理事）であるのも奇遇である。

同志社病院と佐伯邸の跡地（KBS裏）には、石碑がひっそりと佇む。1950年の設置で、「受るよりも與ふるは福也」と刻む。佐伯の教育観、人生観をよく示す聖句である。



佐伯理一郎米寿記念碑
清和キリスト教会北隣に立つ

佐伯理一郎（さえき・りいちろう）

1862.4.3～1953.5.30

クリスチャン・ドクター。熊本県で誕生。熊本医学校を卒業後、東京へ出て受洗。海軍医となって欧米に留学し、帰国後、同志社病院に奉職。京都看病婦学校でも教える。1897年、同志社病院と京都看病婦学校の経営を同志社から一任される。同志社病院は1906年に廃止されたが、佐伯は看護学校のほかにも佐伯病院、京都産院、京都産婆学校をも経営した。

本井康博（もとい・やすひろ）

1942年、愛知県生まれ（65歳）。

1955年、同志社中学校入学。

1969年、同志社大学大学院経済学
研究科修士課程修了。2004年、神
学部教授。日本プロテスタント史を専
門とし、「同志社科目」群などを担当。
『新島襄を語る』全10巻を刊行中。